

第一章 光る源氏前史の物語

〔第一段 父帝と母桐壺更衣の物語〕

どの帝の御代であつたか、女御や更衣が大勢お仕えなさつていたなか
に、たいして高貴な身分ではない方で、きわだつて御寵愛をあつめてい
らつしやる方があつた。

最初から自分こそはと氣位い高くいらつしやつた女御方は、不愉快
な者だと見くんだり嫉んだりなさる。同じ程度の更衣や、その方
より下の更衣たちは、いつそう心穏やかでない。朝晩のお側仕えにつ
けても、他の妃方の氣持ちを不愉快ばかりにさせ、嫉妬を受けるこ
とが積もり積もつたせいであろうか、とても病氣がちになつてゆき、何

となく心細げに里に下がっていることが多いのを、ますますこの上なく不憫な方とおぼし召されて、誰の非難に対してもおさし控えあそばすことがおできになれず、後世の語り草にもなつてしまひそうなお扱ひぶりである。

上達部や殿上人なども、人ごとながら目をそらしそらしして、「とても眩しいほどの御寵愛である。唐国でも、このようなことが原因となつて、国も乱れ、悪くなつたのだ」と、しだいに国中でも困つたことの人々のもてあましの種となつて、楊貴妃の例までも引き合ひに出されそうになつてゆくので、たいそういたたまれないことが数多くなつていくが、もつたいない御愛情の類のないのを頼みとして、宮仕え生活をしていらつしやる。

父親の大納言は亡くなつて、母親の北の方が古い家柄の人の教養あ

る人なので、両親とも揃って、今現在の世間の評判が勢い盛んな方々にもたいしてひけをとらず、どのような事柄の儀式にも対処なさっていたが、これといったしつかりとした後見人がいないので、こと改まった儀式の行われるときには、やはり頼りとする人がなく心細い様子である。

〔第二段 御子誕生（一歳）〕

前世でも御宿縁が深かったのであろうか、この世にまたとなく美しい玉のような男の御子までがお生まれになった。早く早くとじれったくおぼし召されて、急いで参内させて御覧あそばすと、たぐい稀な嬰兒

のお顔だちである。

第一皇子は、右大臣の娘の女御がお生みになつた方なので、後見がしつかりしていて、真正正銘の皇太子になられる君だと、世間でも大切に扱い申し上げるが、この御子の輝く美しさにはお並びになりようもなかつたので、一通りの大切なお気持ちであつて、この若君の方を、自分の思いのままにおかわいがりあそばされることはこの上ない。

最初から女房並みの帝のお側用をお勤めなさらねばならない身分ではなかつた。評判もとても高く、上流人の風格があつたが、むやみにお側近くにお召しあそばされ過ぎて、しかるべき管弦の御遊の折々や、どのような催事でも雅趣ある催しがあるたびごとに、まっさきに参上させなされる。ある時にはお寝過ごしなされて、そのまま伺候させておきなされるなど、むやみに御前から離さずに御待遇あそばされた

うちに、自然と身分の低い女房のようにも見えたが、この御子がお生まれになつて後は、たいそう格別にお考えおきあそばされるようになっていたので、「東宮坊にも、ひよつとすると、この御子がおなりになるかもしれない」と、第一皇子の母女御はお疑いになっていた。誰よりも先に御入内なされて、大切にお考えあそばされることは一通りでなく、皇女たちなども生まれていらつしやるので、この御方の御諫めだけは、さすがにやはりうるさいことだが無視できないことだと、お思い申し上げあそばされるのであった。

もつたいない御庇護をお頼り申してはいるものの、軽蔑したり落度を探したりなさる方々は多く、ご自身はか弱く何となく頼りない状態で、なまじ御寵愛を得たばかりにしなくてもよい物思いをなさる。お局は桐壺である。おおぜいのお妃方の前をお素通りあそばされて、

そのひっきりなしのお素通りあそびしに、お妃方がお気をもめ尽くしになるのも、なるほどごもつともであると思えた。参上なさるにつけても、あまり度重なる時々には、打橋や、渡殿のあちこちの通路に、けしからぬことをたびたびして、送り迎えの女房の着物の裾が、がまんできかないような、とんでもないことがある。またある時には、どうしても通らなければならぬ馬道の戸を鎖して閉じ籠め、こちら側とあちら側とで示し合わせて、進むも退くもならないように困らせなさることも多かった。何かにつけて数知れないほど辛いことばかりが増えていくので、たいそうひどく思い悩んでいるのを、ますますお気の毒におぼし召されて、後涼殿に以前から伺候していらつしやうた更衣の部屋を他に移させなされて、上局として御下賜あそびす。その方の恨みはなおいっそうに晴らしようがない。

〔第三段 若宮の御袴着(三歳)〕

この御子が三歳におなりの年に、御袴着の儀式を一宮がお召しになつたのに劣らず、内蔵寮や納殿の御物をふんだんに使つて、大變に盛大におさせあそばす。そのことにつけても、世人の非難ばかりが多かつたが、この御子が成長なきて行かれるお顔だちやご性質が世間に類なく素晴らしいまでにお見えになるので、お憎みきれになれないものごとの情理がお分かりになる方は、「このような方もこの末世にお生まれになるものであつたよ」と、驚きあきれる思いで目を見張つていらつしやる。

〔第四段 母御息所の死去〕

その年の夏、御息所が、頼りない感じに落ち入って、退出しようとなさるのを、お暇を少しもお許しあそばささない。ここ数年来、いつもの病状になっていらつしやるので、お見慣れになつて、「このまましばらく様子を見よ」とばかり仰せられるうちに、日々に重くおなりになつて、わずか五、六日のうちにひどく衰弱したので、母君が涙ながらに奏上して、退出させ申し上げなさる。このような時にも、あつてはならない失態を演じてはならないと配慮して、御子はお残し申して、人目につかないようにして退出なさる。

決まりがあるので、お気持ちのままにお留めあそばすこともできず、お見送りさへままならない心もとなきを、言いようもなく無念におぼし召される。たいそう照り映えるように美しくかわいらしい人が、ひどく顔がやつれて、まことにしみじみと物思うことがありながらも、言葉には出して申し上げることもできずに、生き死にもわからないほどに息も絶えだえでいらつしやるのを御覧になると、あとさきもお考えあそばされず、すべてのことを泣きながらお約束あそばされるが、お返事を申し上げることもおできになれず、まなざしなどもとてもだるそうで、常よりいつそう弱々しくて、意識もないような状態で臥せていたので、どうしたらよいものかとお惑乱あそばされる。輦車の宣旨などを仰せ出されても、再びお入りあそばしては、どうしてもお許しあそばされることができない。

「死出の旅路にも、後れたり先立つたりするまいと、お約束あそばしたものを。いくらそうだとしても、おいてけぼりにしては、行ききれまい」

と仰せになるのを、女もたいそう悲しいと、お顔を押し上げて、

「人の命には限りがあるものと、今、別れ路に立ち、悲しい気持ちでいますが、わたしが行きたいと思う路は、生きている世界への路でございます。ほんとうにこのようにと存じておりましたならば」

と、息も絶えだえに、申し上げたようなことはありそうな様子であるが、たいそう苦しげに気力もなきそうなので、このままの状態です。最期となってしまふようなこともお見届けしたいと、お考えあそばされるが、「今日始める予定の祈祷などを、しかるべき僧たちの承つておられますが、今宵から始めます」と言つて、おせき立て申し上げるので、やむを得なくお思ひあそばしながら退出させなされる。

お胸がひしと塞がつて、少しもうとうとなされず、夜を明かしかね

あそばす。勅使が行き来する間もないうちに、しきりに気がかりなお氣持ちをこの上なくお漏らしあそばしていらしたところ、「夜半少し過ぎたところに、お亡くなりになりました」と言つて泣き騒ぐので、勅使もたいそうがっかりして帰参した。お耳にあそばす御心の転倒、どのような御分別をも失われて、引き籠もつておいであそばす。

御子は、それでもとても御覧になつていたいが、このような折に宮中に伺候していらつしやるのは、先例のないことなので、退出なさろうとする。何事があつたのだろうかとお分かりにならず、お仕えする人々が泣き惑い、父主上もお涙が絶えずおこぼれあそばしているのを、変だなど押し上げなさいているのを、普通の場合でさえ、このような別れの悲しくないことはない次第なのを、いつそうちに悲しく何とも言いようがない。

〔第五段 故御息所の葬送〕

しきたりがあるので、先例の葬法どおりにお営み申すのを、母北の方は、娘と同じく煙となつて死んでしまいたいと、泣きこがれなきて、御葬送の女房の車に後を追つてお乗りになつて、愛宕という所であらう、そつと、そつと、そつと、その葬儀を執り行つてゐるところに、お着きになつたお氣持ちは、どんなであつたであらうか。「お亡骸を見ながら、なおも生きていらつしやるものと思われのが、たいして何にもならないので、遺灰におなりになるのを拝見して、今はもう死んだ人なのだ、きつぱりと思ひ諦めよう」と、分別あるようにおつしやっていたが、車から落ちてしまひ、さうなほどにお取り乱しなされるので、やはり思つたとおりだと、女房たちも手をお焼き申す。

内裏からお勅使が参る。従三位の位を追贈なさる旨を、勅使が到着してその宣命を読み上げるのが、悲しいことであつた。せめて女御とだけでも呼ばせずに終わつたのが、心残りで無念に思ひ召されたので、せめてもう一段上の位階だけでもと、御追贈あそばすのであつた。このことにつけても非難なさる方々が多かつた。人の情理をお分かりになる方は、姿態や容貌などが素晴しかつたことや、氣立てがおだやかで欠点がなく、憎み難い人であつたことなどを、今となつてお思い出しになる。見苦しいまでの御寵愛ゆえに、冷たくお妬みなさつたのだが、性格がしみじみと情愛こまやかでいらつしやつたご性質を、主上づきの女房たちも互いに恋い惚びあつていた。亡くなつてから人はと言ふことは、このような時のことかと思われた。

第二章 父帝悲秋の物語

「第一段 父帝悲しみの日々」

いつのまにか日数は過ぎて、後の法要などの折にも情愛こまやかに
お見舞いをお遣わしあそばす。時が過ぎて行くにしたがつて、どうし
ようもなく悲しく思われなさるので、女御更衣がたの夜の御伺候な
どもすっかりお命じにならず、ただ涙に濡れて日をお送りあそばさ
れているので、拝し上げる人までが露つぽくなる秋である。「亡くなつ
た後まで、人の心を晴ればれさせなかつた御寵愛の方だこと」と、弘徽
殿女御などにおかれては今もなお容赦なくおっしゃるのであった。一
の宮を拝し上げあそばされるにつけても、若宮の恋しさだけが思い

出されお思い出されして、親しく仕える女房や御乳母などをたびたびお遣わしになつては、ご様子をお尋ねあそばされる。

〔第二段 鞆負命婦の弔問〕

野分めいて、急に肌寒くなった夕暮どき、いつもよりもお思い出しになることが多くて、鞆負命婦という者をお遣わしになる。夕月夜の美しい時刻に出立させなきて、そのまま物思いに耽つておいであそばす。このような折には、管弦の御遊などをお催しあそばされたが、とりわけ優れた琴の音を掻き鳴らし、ついちよつと申し上げる言葉も、人とは格別であつた雰囲気や顔かたち、面影となつてひたとわが身に添うように思し召されるにつけても、闇の中の現実にはやはり及

ばないのであった。

命婦は、あちららに参着して、門を潜り入るなり、しみじみと哀れ深い。未亡人暮らしであるが、娘一人を大切にお世話するため、あれこれと手入れをきちんとして、見苦しくないようにしてお暮らしになつていたが、亡き子を思う悲しみに暮れて臥せていらつしやつたうちに、雑草も高くなり、野分のためにつらそう荒れたような感じがして、月の光だけが八重葎にも遮られずに差し込んでいた。寢殿の南面で車から下ろして、母君も、すぐにはご挨拶できない。

「今まで生きながらえておりましたのがとても情けないのに、このようなお勅使が草深い宿の露を分けてお訪ね下さるにつけても、とても恥ずかしいございます」

と言つて、ほんとうに身を持ちこらえられないくらいにお泣きになる。

「『お訪ねいたしたところ、ひとしおお気の毒で、心も魂も消え入るようでした』と、典侍が奏上なきつたが、物の情趣を理解いたさぬ者でも、なるほどまことに忍びがとうございます」

と言つて、少し気持ち落ち着かせてから、仰せ言をお伝え申し上げる。

「『しばらくの間は夢かと思ひ込られずにはいられなかつたが、だんだんと心が静まるにつれてかえつて、覚めるはずもなく堪えがたいのは、どのようにしたらよいものかとも、相談できる相手さえないので、人目につかないようにして参内なさらぬか。若宮がたいそう気がかりで、湿っぽい所でお過ごしになっているのも、おいたわしくお思ひあそばされますから、早く参内なさい』などと、はきはきとは最後まで仰せられず、涙に咽ばされながら、また一方では人びともお氣弱な

と拝されるだろうと、お憚りあそばされないわけではない御様子がおいたわしく、最後まで承らないようなかっこうで、退出いたして参りました」

と言つて、お手紙を差し上げる。

「目も見えませんが、このような恐れ多いお言葉を光といたしまして」と言つて、御覧になる。

「時がたてば少しは気持ちの紛れることもあるうかと、心待ちに過す月日がたつにつれて、たいそうがまんができなくなるのはどうにもならないことである。幼い人をどうしているかと案じながら、一緒にお育てしていない気がかりさよ。今は、やはり故人の形見と思つて、参内なされよ」

などと、心こまやかにお書きあそばされていた。

「宮中の萩に野分が吹いて露を結ばせたり散らそうとする風の音を聞くにつけ、幼子の身が思いやられる」

とあるが、最後までお読みきれになれない。

「長生きが、とても辛いことだと存じられますうえに、高砂の松がどう思ふかさえも、恥ずかしく存じられますので、内裏にお出入りいたしますことは、さらにとても遠慮いたしたい気持ちでいっぱいです。畏れ多い仰せ言をたびたび承りながらも、わたし自身はとも思ひ立つことができません。若宮は、どのようにお考えなさっているのか、参内なさることばかりお急ぎになるようなので、ごもつともだと悲しく拝見しておりますなどと、ひそかに存じております由をご奏上なさってください。不吉な身でございますので、こうして若宮がおいでになるのも、忌まわしくもあり畏れ多いことでございます」

とおつしやる。若宮はもうお寝みになっていた。

「拝見して、詳しくご様子も奏上いたしたいのですが、帝がお待ちあそばされて、帝がお待ちはなされて、夜も更けてしまいました」と言つて急ぐ。

「子を思う親心の悲しみの堪えがたいその一部だけでも、晴らすほどに申し上げとうございますので、個人的にでもゆつくりとお出くださいませ。数年来、おめでたく晴れがましい時にお立ち寄りくださいましたのに、このようなお悔やみのお使いとしてお目にかかるとは、返す返すも情けない運命でございますこと。」

生まれた時から、心中に期待するところのあつた人で、亡き夫大納言が、臨終の際となるまで、『ともかく、わが娘の宮仕えの宿願を、きつと実現させ申しなさい。わたしが亡くなつたからといって、落胆して挫けてはならぬ』と、繰り返し戒め遺されましたので、これといった後

見人のない宮仕え生活は、かえつてしないほうがまだと存じながらも、ただあの遺言に背くまいとばかりに、出仕させましたところ、身に余るほどのお情けが、いろいろもつたないので、人にあるまじき恥を隠し隠ししては、宮仕え生活をしていられたようでしたが、人の嫉みが深く積もり重なり、心痛むことが多く身に添わつてまいりましたところ、横死のようなありさまで、とうとうこのようなことになってしまいましたので、かえつて辛いことだと、その恐れ多いお情けを存じておられます。このような愚痴も理屈では割りきれない親心の迷いです」と、最後まで言えないで涙に咽んでいらつしやるうちに、夜も更けてしまつた。

「主上様もご同様でございまして。『御自分のお心ながら、強引に周囲の人が目を見張るほど御寵愛なされたのも、長くは続きそうに

ない運命だったからなのだなあと、今となってはかえって辛い人との宿縁であった。決して少しも人の心を傷つけたようなことはないと思うのに、ただこの人との縁が原因で、たくさんの恨みを負うなずのない人の恨みをもかったあげくには、このように先立たれて、心静めるすべもないところに、ますます体裁悪く愚か者になってしまったのも、前世がどんなであったのかと知りたい』と何度も仰せられては、いつもお涙がちばかりでいらつしやいます」と話しても尽きない。泣く泣く、「夜がたいそう更けてしまったので、今夜のうちにご報告を奏上しよう」と急いで帰参する。

月は入り方で、空が清く澄みわたっているうえに、風がとても涼しくなつて、草むらの虫の声ごえが、涙を誘わせるようなものも、まことに立ち去りがたい庭の風情である。

「鈴虫が声をせいっぱい鳴き振るわせても

長い秋の夜を尽きることなく流れる涙でございませうこと」

お車に乗りかねている。

「ただでさえ虫の音のように泣き暮らしておりました荒れ宿に

さらに涙をもたらしませう内裏からのお使い人よ

恨み言もつい申し上げてしまひそうぞ」

と言わせなせう。趣きのあるような御贈物などあらねばならない時でもないのです、ただ亡き更衣のお形見にと、このような入用もあるうかとお残しになつた御衣装一揃いに、御髪上げの調度のような物をお添えになる。

若い女房たちは、悲しいことは言うまでもない、内裏の生活を朝夕など馴れ親しんでいるので、たいそう物足りなく、主上のご様子な

どをお思い出し申し上げると、早く参内なさるようにとお勧め申し上げるが、「このように忌まわしい身が付き随つて参内申すようなのも、まことに世間の聞こえが悪いであろうし、また、しばしも拝さずにいることも気がかりに」お思い申し上げなさつて、気分よくさつぱりとは参内させなさることがおできになれないのであった。

〔第三段 命婦帰参〕

命婦は、「まだお寝みあそばされなかつたのだわ」と、しみじみと拝し上げる。御前にある壺前裁がたいそう美しい盛りに咲いているのを御覧あそばされるようにして、しめやかにおくゆかしい女房ばかり四、五人を伺候させなさつて、お話をさせておいであそばすのであった。最

近、毎日御覧なされる「長恨歌」の御絵、それは亭子院がお描きあそばされて、伊勢や貫之に和歌を詠ませなされたものだが、わが国の和歌や唐土の漢詩などをも、ひたすらその方面の事柄を、日常の話題にあそばされている。たいそう詳しく里の様子をお尋ねあそばす。しみじみとした趣きをひそかに奏上する。お返事を御覧になると、

「たいへんに恐れ多いお手紙を頂戴いたしましたは、どうしてよいか分かりません。このような仰せ言を拝見いたしましたしても、心の中はまったく闇に思い乱れておりまして。

荒い風を防いでいた木が枯れてからは

小萩の身の上が気がかりでなりません」

などと言うようにやや不謹慎なのを、気持ち静まらない時だからとお見逃しになるのである。決してこう取り乱した姿を見せまいと、

お静めなさるが、まったく堪えることがおできあそばされず、初めてお召しあそばした年月のことまであれこれと思い出され、何から何まで自然とお思い続けられて、「片時の間も離れてはいられなかつたのに、よくこうも月日を過せたものだ」と、あきれてお思いあそばされる。

「故大納言の遺言に背かず、宮仕への宿願をよく果たしたお礼には、その甲斐があつたようにと思ひ続けていたが。詮ないことだ」とふと仰せになって、たいそう氣の毒にと思ひを馳せられる。「そうではあるが、いずれ若宮がご成長されたならば、しかるべき機会がきつとあろう。長生きをしてそれまでじつと辛抱するがよい」

などと仰せになる。あの贈物を帝のお目に入れる。「亡くなつた人の住処を探し当てたという証拠の釵であつたならば」とお思いあそばしても、まったく甲斐がない。

「亡き更衣を探し行ける幻術士がいてくれればよいのだがな、人づてにでも魂のありかをどこそこと知ることができるようにな」

絵に描いてある楊貴妃の容貌は、上手な絵師と言っても、筆力には限界があつたのでまったく生氣が少ない。「大液の芙蓉、未央の柳」の句にも、なるほど似ていた容貌だが、唐風の装いをした姿は端麗ではあつたろうが、慕わしきがあつて愛らしかつたのを思い出しになると、花や鳥の色や音にも喩えようがない。朝夕の口癖に「比翼の鳥となり、連理の枝となろう」とお約束あそびしていたのに、思うようにならなかつた人の運命が、永遠に尽きることなく恨めしかつた。

風の音や、虫の音を聞くにつけて、何とはなく一途に悲しく思われなさるが、弘徽殿女御におかれては、久しく上の御局にもお上がりにならず、月が美しいので、夜が更けるまで管弦の遊びをなさっている

ようである。実に興ざめで、不愉快だ、とお聞きあそばす。最近のご様子を拝する殿上人や女房などは、はらはらする思いで聞いていた。たいへんに気が強くてとげとげしい性質をお持ちの方なので、何ともお思いなさらず無視して振る舞っていらつしやるのである。月も沈んでしまった。

「雲の上の宮中までも涙に曇って見える秋の月だ

ましてやどうして澄んで見えようか、草深い里で」

お思いやりになりながら、灯芯をかき立てて油の尽きるまで起きておいであそばす。右近衛府の官人の宿直申しの声が聞こえるのは、丑の刻になったのであろう。人目をお考えになって、夜の御殿にお入りあそばしても、うとうととまどろみあそばすことも難しい。朝になってお起きあそばそうとしても、「夜の明けるのも分らないで」とお思

い出しになられるにつけても、やはり政治をお執りになることは怠りがちになってしまいそうである。

お食物などもお召し上がりにならず、朝餉には形だけお箸をおつけになつて、大床子の御膳などは、まったくお心に入らぬかのように手をおつけあそばさないので、お給仕の人たちは皆、おいたわしいご様子を押して嘆く。総じて、お側近くお仕えする人たちは、男も女も、「たいそう困ったことですな」とお互いに言い合つては溜息をつく。「こうなるはずの前世からの宿縁が、おありあそばしたのでしよう。大勢の人びとの非難や嫉妬をもお憚りあそばさず、あの方の事に關しては、御分別をお失いあそばされ、今は今で、このように政治をお執りになることも、お捨てになつたようになつて行くのは、たいへんに困つたことである」と、唐土の朝廷の例まで引き合ひに出して、ひそひそと嘆息するのであった。

第三章 光る源氏の物語

〔第一段 若宮参内(四歳)〕

月日がたつて、若宮が参内なされた。ますますこの世の人とは思われず美しく成長なさっているのです、たいへん不吉なまでにお感じになった。

翌年の春に、東宮がお決まりになる折にも、とても第一皇子を超えさせたく思し召されたが、ご後見すべき人もなく、また世間が承知するはずもないことだったので、かえって危険であるとお差し控えになつて、顔色にもお出しあそばされずに終わつたので、「あれほどおかわいがつていらつしやつたが、限界があつたのだなあ」と、世間の人びともお噂申し上げ、弘徽殿女御もお心を落ち着けなされた。

あの祖母北の方は、悲しみを晴らすすべもなく沈んでいらつしやつて、せめて死んだ娘のいらつしやる所にでも尋ねて行きたいと願つていらつしやつた現れか、とうとうお亡くなりになつてしまつたので、またこのことを悲しく思し召されること、この上もない。御子は六歳におなりのお年なので、今度はお分かりになつて、恋い慕つてお泣きになる。長年お親しみ申し上げなきてきたのに、後に残して先立つ悲しみを、繰り返し繰り返しおつしやつていたのであつた。

〔第二段 読書始め（七歳）〕

今は内裏にばかりお暮らしになつてゐる。七歳におなりになつたので、読書始めなどをおさせになつたところ、この世に類を知らないくらい聡

明で賢くいらつしやるので、空恐ろしいまでにお思いあそばされる。

「今はどなたもどなたもお憎みなきれまい。母君がいけないということだけでもおかわいがりください」と仰せになって、弘徽殿などにもお渡りあそばすお供としては、そのまま御簾の内側にお入れ申し上げなされる。恐ろしい武士や仇敵であつても、見るとつい微笑ますにはいられない様子でいらつしやるので、放つておくこともおできになれない。姫皇女たちがお二方、この御方にはいらつしやつたが、お並びになりようもないのであつた。他の女御がたもお隠れにならずに、今から優美で立派でいらつしやるので、たいそう趣きがある一方で気のおける遊び相手だと、どなたもどなたもお思い申し上げていらつしやつた。

本格的な御学問はもとよりのこと、琴や笛の才能でも宮中の人びとを驚かせ、すべて一つ一つ数え上げていったら、仰々しく嫌になつて

しまうくらい、優れた才能のお方なのであった。

〔第三段 高麗人の觀相、源姓賜わる〕

その当時、高麗人が来朝していた中に、優れた人相見がいたのをお聞きあそばして、内裏の内に召し入れることは宇多帝の御遺誠があるので、たいそう人目を忍んで、この御子を鴻臚館にお遣わしになった。後見役のようになしてお仕えする右大弁の子供のように思わせてお連れ申し上げると、人相見は目を見張って、何度も首を傾け不思議がる。

「国の親となつて、帝王の最高の地位につくはずの相をお持ちでいらつしやる方で、そういう人として占うと、国が乱れ民の憂えることが起

こるかも知れません。朝廷の重鎮となって、政治を補佐する人として
占うと、またその相ではないようです」と言う。

右大弁も、たいそう優れた学識人なので、語り合った事柄は、たいへんに興味深いものであった。漢詩文などを作り交わして、今日明日のうちにも帰国する時に、このようにめったにない人に対面した喜びや、かえって悲しい思いがするにちがいないという気持ちを趣き深く作つたのに対して、御子もたいそう心を打つ詩句をお作りになつたので、この上なくお褒め申して、素晴らしいいくつもの贈物を差し上げる。朝廷からもたくさんの贈物を御下賜なさる。

自然と噂が広がって、お漏らしあそばさないが、東宮の祖父大臣などは、どのようなわけかとお疑いになつていたのであった。

帝は、畏れ多い考えから、倭相をお命じになつて、既にお考えになつ

ていたところなので、今までこの若君を親王にもなさらなかつたが、

「相人はほんとうに優れていた」とお思いになつて、「無品の親王で外戚の後見のない状態で彷徨わすまい。わが御代もいつまで続くか分からないものだから、臣下として朝廷のご補佐役をするのが、将来も頼もしそうに思われることだ」とお決めになつて、ますます諸道の学問を習わせなさる。

才能は格別聡明なので、臣下とするにはたいそう惜しいけれど、親王とおなりになつたら、世間の人から立坊の疑いを持たれるにちがいなさそうにいらつしやるので、宿曜道の優れた人に占わせなさつても、同様に申すので、源氏にして上げるのがよいとお決めになつていた。

〔第四段 先帝の四宮（藤壺）入内〕

年月がたつにつれて、御息所のことをお忘れになる折がない。「心慰めることができようか」と、しかるべき婦人方をお召しになるが、「せめて準ずる程に思われなさる人さえめつたにいない世の中だ」と、厭わしいばかりに万事が思し召されていたところ、先帝の四の宮で、ご容貌が優れておいであるという評判が高くいらつしやる方で、母后がまたとなく大切にお世話申されていられる方を、主上にお仕えする典侍は、先帝の御代からの人で、あちらの宮にも親しく参つて馴染んでいたのです、ご幼少でいらつしやつた時から拝見し、今でもちらつと拝見して、「お亡くなりになった御息所のご容貌に似ていらつしやる方を、三代の帝にわたつて宮仕えいたしてまいりまして、一人も拝見できません

んでしたが、後の宮の姫宮さまは、たいそうよく似てご成長あそばしていますわ。世にもまれなご器量よしのお方でございます」と奏上したところ、「ほんとうにか」と、お心が止まって、丁重に礼を尽くしてお申し込みあそばしたのであった。

母后は、「まあ怖いこと。東宮の母女御がたいそう意地が悪くて、桐壺の更衣が、露骨に亡きものにされてしまった例も不吉で」と、おためらいなさって、すらすらとご決心もつかなくなつうちに、母后もお亡くなりになつてしまった。

心細い有様でいらつしやるので、「ただ、わが姫皇女たちと同列にお思い申そう」と、たいそう丁重に礼を尽くしてお申し上げあそばす。お仕える女房たちや、御後見人たち、ご兄弟の兵部卿の親王などは、「こうして心細くおいでになるよりは、内裏でお暮らしあそばし

て、きつとお心が慰むように」などとお考えになつて、参内させ申し上げなされた。

藤壺と申し上げる。なるほど、ご容貌や姿は不思議なまでによく似ていらつしやうた。この方は、ご身分も一段と高いので、そう思つて見るせいか素晴らしくて、お妃方もお貶み申すこともおできになれないので、誰に憚ることなく何も不足ない。あの方は、周囲の人がお許し申さなかつたところに、御寵愛が憎らしいと思われるほど深かつたのである。ご愛情が紛れるというのではないが、自然とお心が移つて行かれて、格段にお慰みになるようなのも、人情の性というものであつた。

〔第五段 源氏、藤壺を思慕〕

源氏の君は、お側をお離れにならないので、誰より頻繁にお渡りあそばす御方は、恥ずかしがってばかりいらつしやれない。どのお妃方も自分が人より劣っていると思つていらつしやる人があるうか、それぞれにとつても素晴らしいが、お年を召しておいでになるのに対して、とても若くかわいらしい様子で、頻りにお姿をお隠しなさるが、自然と漏れ拝見する。

母御息所は、顔かたちすらご記憶でないのを、「大変によく似ていらつしやる」と、典侍が申し上げたのを、幼心にとつても慕わしいと思ひ申し上げなさつて、いつもお側に参りたく、「親しく拝見したい」と思われなさる。

主上もこの上なくおかわいがりのお二方なので、「お疎みなさいますな。不思議と若君の母君となぞらえ申してもよいような気持ちがある。失礼だと思いなさらず、いとおしみなさい。顔だちや、目もとなど、大變によく似ているため、母君のようにお見えになるのも、母子として似つかわしくはない」などと、お頼み申し上げなさっているので、幼心にも、ちよつとした花や紅葉にことつけても、お気持ちを表し申す。この上なく好意をお寄せ申していらつしやるので、弘徽殿の女御は、またこの宮ともお仲が好ろしくないので、それに加えて、もとからの憎しみももり返して、不愉快だと思ひになつていた。

世の中にまたとないお方だと拝見なさり、評判高くおいでになる宮のご容貌に対しても、やはり照り映える美しさにおいては比較できないほど美しそうなので、世の中の人には、「光る君」とお呼び申し上げ

る。藤壺もお並びになって、御寵愛がそれぞれに厚いので、「輝く日の宮」とお呼び申し上げる。

〔第六段 源氏元服（十二歳）〕

この君の御童子姿を、とても変えたくなくお思ひであるが、十二歳で御元服をなさる。御自身お世話焼かれて、作法どおりの上にさらにできるだけの事をお加えあそばす。

先年の東宮の御元服が、紫宸殿で執り行われた儀式が、いかめしく立派であった世の評判にひけをおとらせにならない。各所での饗宴などにも、内蔵寮や穀倉院など、規定どおり奉仕するのでは、行き届かないことがあってはいけなさと、特別に勅命があつて、善美を尽く

してお勤め申した。

おいでになる清涼殿の東廂の間に、東向きに椅子を立てて、元服なさる君のお席と加冠役の大臣のお席とが、御前に設けられている。儀式は申の時で、その時刻に源氏が参上なさる。角髪に結つていらつしやる顔つきや、童顔の色つやは、髪形をお変えになるのは惜しい感じである。大蔵卿が理髪役を奉仕する。たいへん美しい御髪を削ぐ時、いたいたしそうなのを、主上は、「亡き母の御息所が見たならば」と、お思い出しになると、涙が抑えがたいのを、思い返してじっとお堪ええそばす。

加冠なさつて、御休息所にお下がりになって、ご装束をお召し替えなさつて、東庭に下りて拝舞なさる様子に、一同涙を落としなさる。帝は帝で、誰にもまして堪えきれなされず、お悲しみの紛れる時も

あつた一時のことを、立ち返つて悲しく思われなさる。たいそうこのように幼い年ごろでは、髪上げして見劣りをするのではないかと御心配なさつていたが、驚くほどかわいらしさも加わつていらつしやつた。

加冠役の大臣が皇女でいらつしやる方との間に儲けた一人娘で大切に育てていらつしやる姫君を、東宮からも御所望があつたのを、ご躊躇なさることがあつたのは、この君に差し上げようとお考えからなのであつた。帝からの御内意を頂戴させていたどころ、「それでは、元服の後の後見する人がいないようなので、その添い臥しにでも」とお促しあそばされたので、そのようにお考えになつていた。

御休息所に退出なさつて、参会者たちが御酒などをお召し上がりになる時に、親王方のお席の末席に源氏はお座りになつた。大臣がそれとなく仄めかし申し上げなさることがあるが、気恥ずかしい年ご

ろなので、どちらともはつきりお答え申し上げなさい。

御前から掌侍が宣旨を承り伝えて、大臣に御前に参られるようにとのお召しがあるので、参上なさる。御祿の品物を、主上づきの命婦が取りついで賜わる。白い大袿に御衣装一領、例のとおりである。

お盃を賜る折に、

「幼子の元服の折、末永い仲を

そなたの姫との間に結ぶ約束はなさったか」

お心づかいを示されて、はつとさせなさる。

「元服の折、約束した心も深いものとなりましょう

その濃い紫の色さえ変わらなければ」

と奏上して、長橋から下りて拝舞なさる。

左馬寮の御馬、蔵人所の鷹を留まり木に据えて頂戴なさる。御階

のもとに親王方や上達部が立ち並んで、禄をそれぞれの身分に応じて頂戴なさる。

その日の御前の折櫃物や、籠物などは、右大弁が仰せを承って調べさせたのであつた。屯食や禄用の唐櫃類など、置き場もないくらいで、東宮の御元服の時よりも数多く勝っていた。かえつていろいろな制限がなくて盛大であつた。

〔第七段 源氏、左大臣家の娘(葵上)と結婚〕

その夜、大臣のお邸に源氏の君を退出させなさる。婿取りの儀式は世に例がないほど立派におもてなし申し上げなされた。とても若くおいでなのを、不吉なまでにかわいとお思い申し上げなされた。女君

は少し年長でおいでなのに対して、婿君がたいそうお若くいらつしやるので、似つかわしくなく恥ずかしいとお思いでいらつしやった。

この大臣は帝のご信任が厚い上に、姫君の母宮が帝と同じ母后のお生まれでいらつしやったので、どちらから言っても立派な上に、この君までがこのように婿君としてお加わりになったので、東宮の御祖父で、最後には天下を支配なさるはずの右大臣のご威勢も、敵ともなく圧倒されてしまった。

ご子息たちが大勢それぞれの方々にいらつしやる。宮がお生みの方は、蔵人少将でたいそう若く美しい方なので、右大臣が、左大臣家とのお間柄はあまりよくないが、他人として放っておくこともおできになれず、大切になさっている四の君に婿取りなさっていた。劣らず大切にお世話なさっているのは、両家とも理想的な婿舅の間柄である。

源氏の君は、主上がいつもお召しになつて放さないもので、氣樂に私邸で過すこともおできになれない。心中では、ひたすら藤壺のご様子を、またとない方とお慕い申し上げて、「そのような女性こそ妻にしたいものだ、似た方もいらつしやらないな。大殿の姫君は、たいそう興趣ありそうに大切に育てられている方だと思われるが、少しも心惹かれない」というように感じられて、幼心一つに思いつめて、とても苦しいまゝでに悩んでいらつしやるのであつた。

〔第八段 源氏、成人の後〕

元服なきつてから後は、かつてのように御簾の内側にもお入れにならない。管弦の御遊の時々、琴と笛の音に心通わし合い、かすかに漏

れてくるお声を慰めとして、内裏の生活ばかりを好ましく思つていらつしやる。五、六日は内裏に伺候なきつて、大殿邸には二、三日程度、途切れ途切れに退出なきるが、まだ今はお若い年頃であるので、つとめて咎めだてすることなくお許しになつて、婿君として大切にお世話申し上げなきる。

お二方の女房たちは、世間から並々でない人たちをえりすぐつてお仕えさせなきる。お氣に入りそうなお遊びをし、せいっぱいにお世話していらつしやる。

内裏では、もとの淑景舎をお部屋にあてて、母御息所にお仕えしていた女房を退出して散り散りにさせずに引き続きお仕えさせなきる。

実家のお邸は、修理職や内匠寮に宣旨が下つて、またとなく立派

にご改造させなされる。もとの木立や、築山の様子、趣きのある所であつたが、池をことさらに広く造つて、大騒ぎして立派に造営する。

「このような所に、理想とするような女性を迎えて一緒に暮らしたい」とばかり、胸を痛めてお思ひ続けていらつしやる。

「光る君という名前は、高麗人がお褒め申してお付けしたものだ」と、言い伝えているとのことである。